

## あとがき

鈴木省三の仕事の不可思議さのゆえんについては塩田純一さんがテキストにおいて十二分に解き明かして下さったので、私がさらに何か言って屋上屋を架するような真似は望むところではない。あえて何かつけ足すとすれば、それは私が鈴木省三に初めて会ったときに聞いた戦後のアメリカン・ペインティングに対する彼の言葉であろう。というのも、鈴木省三の面妖な、得体の摑めない作品を見る人は、彼とアメリカン・ペインティングの間に何か接点があるなどとは容易に納得しないだろうからだ。

彼は1976年に日本に来たホイットニー美術館のコレクション展を見ている。そこで初めて実物のポロックやルイスを見たときに受けた強烈な印象を私に熱っぽく語ってくれた。特にルイスのステイニング(染み込ませ)の手法の大作を前にして、それをカンヴァスの仕事として行きつくところまで行った仕事だと確信したという話は、彼がしばらくして後にゴムに出会った伏線になっている。もちろん、彼は戦後のアメリカン・ペインティングの仕事を継承しているわけではない。ただ言いたいのは、彼もまたアメリカン・ペインティングの洗礼を受けていて、もしルイスの仕事がなければ彼は未だにカンヴァスに向かって絵を描いているかもしれない、ということだ。いずれにしても、彼はアメリカン・ペインティングに対して彼なりの方法、スタイルで、他に例のない答えを見い出した。筆を使わずに、十本の指先から生み出される風景ならざる

風景とでもいうような不思議なイメージと、妙な生き生きを感じさせる黒いゴムシートとがあいまって、言い換ればモティーフと支持体とがうまく結びついて、正真正銘の不思議な絵になっているのだ。布と木枠でできたフレームではなく、ゴムという単一構造の特性が發揮されて、あたかも異星空間からやって来た生命体のように見えることさえある。彼がルイスなどのアメリカン・ペインティングの成果を無視しては、ここに至り得たかどうか疑わしい。彼もまた、独自の仕方でアメリカン・ペインティングをくぐり抜けてきた一人なのだ。

ところで、ゴーキー、ポロック、ニューマン、ロスコを代表とするアメリカン・ペインティングは当初ヨーロッパからのシュルレアリズムの影響を受け、その変形として誕生した。やがて彼らはシュルレアリズム的なものとは訣別し、いわゆるアメリカン・ペインティングを打ちたてて主流派となつていった。してみると、鈴木省三の仕事は、アメリカン・ペインティングの成果を再びシュルレアリズムに返してやろうとしているかのようにも見えてくるが、こういう考えはいわゆる蛇足というのかもしれない。

最後に、お忙しいなか力のこもった原稿をお寄せ下さった塩田さんをはじめ、展覧会およびカタログの実現に手を貸して下さった方々に御礼申し上げます。

1987年3月

佐谷画廊 佐谷周吾